

素材研究を基盤とした『竹取物語』の単元構想

— 『竹取物語』の教育的価値に着目して—

吉田 茂樹¹⁾

1) 高知大学教育研究部人文社会科学系教育学部門

Unit design of "Taketori-Monogatari" that assumed a study of the material a base

-- I paid my attention to educational value of "Taketori-Monogatari" --

SHIGEKI Yoshida¹⁾

1) Kochi University Faculty of Education

要 約

国語科においては、教科書等に掲載されている素材そのものには指導すべき教育内容が直接反映されていない構造となっている。そのため、どうしても素材となる文章が持っている本来の特徴と指導すべき教育内容との関わりにおいて、素材が持つ教育的価値の見極めを行う（素材を教材化する）ために、素材そのものを深く理解する素材研究が重要となる。このような素材研究を基盤とした教材研究の在り方が理想的であることは間違いない。しかし、実際に徹底した素材研究から素材となる文章が持っている本来の特徴を見出すことから単元を立ち上げた先行研究や先行実践の報告は多くない。そこで、本稿ではこうした現状に鑑み、具体的に中学校第1学年の教科書教材である「蓬莱の玉の枝—『竹取物語』から」（光村図書）を素材として、徹底した素材研究を経て試作した単元の概略を提案する。

キーワード：国語科における教材研究 素材研究 竹取物語

1 国語科における教材研究の特徴

(1) 国語科以外の教科における教材研究の中心

いずれの学校種においても、各教科において指導すべき教育内容は、学習指導要領の内容に指導事項として示されている。国語科以外の算数科（数学科）、社会科等の教科では、指導すべき教育内容が教科書等の教材の内容に直接反映されている。たとえば、小学校第6学年を例に挙げると、指導すべき教育内容である、算数科の「円の面積の計算による求め方について理解する」、社会科の「源平の戦い、鎌倉幕府の始まり、元との戦いを手掛かりに、武士による政治が始まったことを理解する」等の指導事項が、そのまま教科書等の教材において説明されている。このように国語科以外の教科では、指導すべき教育内容が学習すべき内容として教科書等の教材にそのまま示される構造を持っている。つまり、初めから授業で使用することを前提として、指導すべき教育内容が教材化された形で教科書等に示されていると言ってよい。したがって、国語科以外の教科においては、教材研究の中心は、教科書等の教材の内容を十分に研究して理解することに置かれることになる。

(2) 国語科における教材研究の中心

一方、国語科では、指導すべき教育内容と教科書等の教材の内容との関係性が、他教科とは大きく異なっている。国語科における教科書等の教材は、基本的に文章によって示される。しかし、教

科書等に掲載されているいかなる文章も、もともとは国語科の授業で使用することを前提として書かれたものではない。つまり、教科書等に掲載されている文章は単なる素材（材料・資料）であり、指導すべき教育内容を説明するために作成されたものではない。これによって、国語科では他教科のように、指導すべき教育内容が学習すべき内容として教科書等の教材の内容にそのまま教材化されている構造にはなっていないのである。

たとえば、小学校6学年の教科書教材『イースター島にはなぜ森林がないのか』に書かれている内容は、「イースター島の森林消失の過程を紹介することで、人と環境の関わりについて考える」ことであろう。しかし、学習指導要領の内容（指導すべき教育内容）には、もちろんそのような指導事項は存在しない。つまり、国語科では、教科書教材には「イースター島の森林消失の過程を紹介することで、人と環境の関わりについて考える」内容が書かれているにもかかわらず、授業で指導すべき教育内容は別に設定されることになる。国語科としての主眼は、イースター島の森林消失という事実の内容を理解させることにあるのではなく、あくまでも説明的文章を読み解くための言語能力を習得させるという教育内容を指導することにあるからである。したがって、国語科における教材研究の中心は、素材となる教科書等の文章等の中に指導すべき教育内容を見定めることで「素材を教材化する」ことに置かれることになる。素材が持つ教育的価値の見極めを行うための素材研究が重要となるということである。

2 国語科における教材研究の問題点

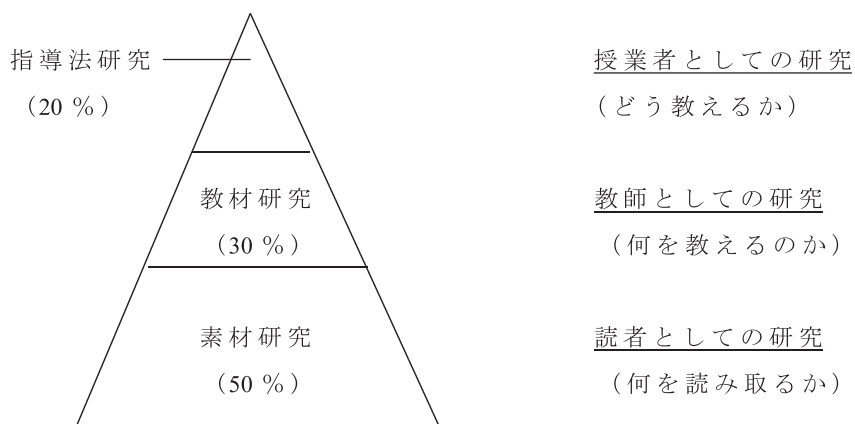
(1) 素材研究の不足

国語科の教材研究について、関口安義(2018)は次のように定義づけている。

教材研究とは、教師が毎時間の授業に際して、あらかじめ扱う素材を研究し、学習者の発達段階・興味・関心に応じてその過程をいかにするかを考える作業をいう。(p.176)

関口は続けて、「教材研究の二つの重要な柱」として、「素材（作品）研究」と「学習者の実態を踏まえた指導法の研究」を挙げている。(p.176)教材研究というと、真っ先にその教材を「どう教えるか」といった方法論が注目される傾向がある。具体的には、どのように指示や発問を組み立てるかや板書の計画を立てるかといった指導技術ばかりに目が向きがちである。関口の教材研究の定義は、素材研究と指導法研究の重要性を並列に述べている点に特徴がある。

野口芳宏(1993)は、指導法研究の基盤としての素材研究の重要性を強調している。野口は、教材研究の構造を、次のような三つの段階に分けて考察している。(p.155)



素材研究とは、教師であるという立場をひとまず置き、一個人としての解釈を成立させるために「読者、一人間としての自分の、力いっぱい読みとり」(p.154)を行う段階を言う。

教材研究とは、教師として「教育のためにこの教材をどのように子どもとかかわらせるのか」(p.159)を明らかにするために、「教師としての読みとり」(p.155)を確立させる段階を言う。指導事項の明確化が中心となる。

指導法研究とは、「授業をどのように組み立てていったらよいのかという具体的なプランを立てる」ために「授業者としての読み取り」(p.155)を行う段階である。

野口は、素材研究を「三つの中で最も大切」(p.154)であるとして、「五割の力を素材研究に注ぎ、三割の力を教材研究に注いであれば指導法研究には残り二割の力を注げば十分すぎるほど」(p.155)と述べている。

以上のように、関口・野口共に素材研究の重要性を主張している。しかし、基盤となる素材研究の段階が十分に機能していないというのが、現在の教材研究の問題点であると考えている。

(2) 素材が持つ教育的価値の見極めの重要性

たとえば、教科書教材『イースター島にはなぜ森林がないのか』と初めて出会った時点では、この文章は単なる素材（材料・資料）であり、指導すべき教育内容が設定されているわけではない。この段階から、教師として授業で教えることを前提として読んでしまうと、教科書や指導書に掲示されている目標・内容に沿って読み取ろうとしてしまう。すると、どうしても素材に対する見方・考え方が一面的な浅い読みとなってしまふ。

この現状を克服するためには、まず教科書教材『イースター島にはなぜ森林がないのか』という文章自体を、「文章構成」「文体」「文章表現の工夫」等の観点から自力で十分に分析し研究する素材研究の段階が必要となる。これによって、『イースター島にはなぜ森林がないのか』は、序論・本論・結論の文章構成を持っている、接続語や文末表現等によって事実を述べている部分と意見を述べている部分が区別されているといった特徴を把握することになる。次に、上述で把握した素材の特徴の中に、国語科の指導内容となるべき知識・技能を見定める教材研究の段階が必要となる。これによって、この説明的文章で指導すべき教育内容として、「C読むこと」の「ア 事実と感想、意見などとの関係を叙述を基に押さえ、文章全体の構造を捉えて要旨を把握すること（構成と内容の把握）」という指導事項を設定するのが適切であることが明らかになる。このように、素材となる文章が持っている本来的な特徴と指導すべき教育内容との関わりにおいて、素材が持つ教育的価値の見極めるために、素材の中に国語科の教育内容となるべき教育的価値を見出すことが重要となるのである。

3 研究の目的と方法

(1) 研究の目的

国語科における教材研究の特徴と問題点は、第1・2章で示した通りである。国語科においては、教科書等に掲載されている素材には指導すべき教育内容が直接反映されていない構造となっている。そのため、どうしても素材となる文章が持っている本来的な特徴と指導すべき教育内容との関わりにおいて、素材が持つ教育的価値の見極めを行う（素材を教材化する）ために、素材そのものを深く理解する素材研究が重要となることを述べた。

以上で述べてきたような素材研究を基盤とした教材研究の在り方が理想的であることは間違いない。しかし、実際に徹底した素材研究から素材となる文章が持っている本来的な特徴を見出すこ

とから単元を立ち上げた先行研究や先行実践の報告は多くない。そこで、本稿ではこうした現状に鑑み、具体的に中学校第1学年の教科書教材である「蓬莱の玉の枝—『竹取物語』から」（光村図書）（以下、教科書教材『竹取物語』と記載）を素材として、徹底した素材研究を経て試作した単元の概略を提案することを目的とする。

(2) 研究の方法

高知大学教育学部附属中学校の国語科とは、日常的に連携を取りながら研究を進めている。特に、毎年11月に開催される「研究発表会」で公開する授業に関しては、拙者が指導助言者として、単元の立ち上げから当日まで継続的に共同研究という形で取り組んでいる。令和元(2019)年度は、学習研究部長の今村有紀教諭が授業を担当することとなったため、教科書や指導書に縛られない独自の発想を生かした単元構想を目指す方向を確認して共同研究を開始した。

前提として、教科書教材『竹取物語』をどう教えるのかという発想はとっていない。まずは徹底した素材研究から素材となる文章の特徴を明らかにし、次に教科書教材の中に指導すべき教育内容を見定める段階を踏んで単元構想を行う方法をとる。その段階を基盤として、最終的に「どう教えるか」といった方法論を考えることとした。

具体的な授業の様子は紙幅の関係で別稿で報告するものとし、本稿では、素材研究を通して素材となる文章が持っている本来的な特徴を見出し、立ち上げた単元の概略を提案するものとする。

4 研究の概略

(1) 教科書教材『竹取物語』（光村図書）の授業化モデル

① 教科書教材としての構成の特徴

国語科の教科書等に掲載される素材としての文章の形態は大きく2種類に分類できる。一つ目は作品が全文掲載されている文章、二つ目は教科書会社によって編集された文章である。二つ目の文章は教科書会社によって指導事項に沿ってすでに教材化された形で掲載される。平成28(2016)年2月5日発行の『国語1』の教科書に掲載されている「蓬莱の玉の枝—『竹取物語』から」は、素材である『竹取物語』を編集して教材化した文章である。具体的には以下のような構成となっている。

①冒頭（原文1、脚注の現代語訳）

②かぐや姫の成長、くらもちの皇子が蓬莱山に辿り着くまで（現代文によるあらすじ1）

③くらもちの皇子が語った蓬莱山の様子（原文2、傍注の現代語訳）

④くらもちの皇子の策略の露見、他の四人の求婚者の失敗、帝の求婚、昇天、帝は不死の薬を山に持っていさせる（現代文によるあらすじ2）

⑤不死の薬を山頂で焼かせる（原文3、脚注の現代語訳）

この後に、「貴公子たちの失敗談」として、石作の皇子・右大臣安倍御主人・大納言大伴御行・中納言石上磨足が、かぐや姫に求婚した件の顛末がコラム的に紹介されている。光村図書の教科書の文章には、原文が提示されている部分は3カ所あるが、他の4社にはすべて掲載されている「昇天」の場面の原文がなく、「③くらもちの皇子が語った蓬莱山の様子」の場面が中心的に原文で掲載されているという構成の特徴を読み取ることができる。

② 教科書教材としての目標の特徴

教科書教材『竹取物語』には、二つの目標が設定されている。(p.147)

- ・古典の文章（文語文・古文）を読み、興味や関心を持ってその世界に触れる。
- ・仮名遣いに注意したり、リズムを味わったりしながら音読し、古典の文章に読み慣れる。

いずれの目標も、平成 20 年『中学校学習指導要領』の第 1 学年〔伝統的な言語文化と国語の特質に関する事項〕「ア 文語のきまりや訓読の仕方を知り、古文や漢文を音読して、古典独特なリズムを味わいながら、古典の世界に触れること」を中心としていることがわかる。

要するに、教科書教材『竹取物語』は、古語のきまり（古語の意味、歴史的仮名遣い）を理解し、「③くらのもちの皇子が語った蓬莱山の様子」の場面が中心的に原文のリズムを味わいながら音読することで、古文についての興味・関心を喚起することを目標として編集された教科書教材と位置付けることができる。

③ 教科書教材としての単元構想

上述②の目標を受け、光村図書の教師用指導書では、以下のような授業の組み立てが「基本の流れ」として提示されている。(p.47) (アンダーライン、()内の記載は吉田による)

第 1 時	①「竹取物語」の冒頭を音読し、内容を理解する。(原文 1) ②図版等を参考にしながら、「竹取物語」のあらすじをつかむ。
第 2 時	③「くらのもちの皇子の架空の冒険談」のいきさつや結末を読み、物語のおもしろさを味わう。 ④「くらのもちの皇子の架空の冒険談」の古文の部分について、 <u>仮名遣いや表現の特徴に注意し</u> 、場面の様子や登場人物の心情について想像しながら <u>音読する</u> 。(原文 2)
第 3 時	⑤かぐや姫と翁たちの別れ、帝の言動の部分を読み、場面の様子や登場人物の心情について考える。 ⑥「ふじの山」の場面について、 <u>仮名遣いや表現の特徴に注意し</u> 、場面の様子や登場人物の心情について想像しながら <u>音読する</u> 。(原文 3)
第 4 時	⑦教材の古文の部分を読み、 <u>古文独特のリズムや古典の世界を味わい読み慣れる</u> 。 ⑧作品のおもしろさとともに、登場人物の心情やものの見方について根拠を明確にしながらかつ自分の考えをまとめる。

三カ所の古文が掲載されている場面（原文 1～3）では、音読を通して「内容を理解」したり、「仮名遣いや表現の特徴に注意」させることを指導のねらいとしていることが読み取れる。しかし、「③くらのもちの皇子が語った蓬莱山の様子」の場面を中心に原文で音読という活動するを通して古語のきまり（古語の意味、歴史的仮名遣い）を理解し、リズムを味わうことができたとしても、それがどのように「⑧作品のおもしろさとともに、登場人物の心情やものの見方について根拠を明確にしながらかつ自分の考えをまとめる」ことにつながっていくのかがはっきりしない。さらに、他の四社にはすべて掲載されている「昇天」の場面の原文を避け、「③くらのもちの皇子が語った蓬莱山の様子」の場面をあえて掲載することで、『竹取物語』のどのような「作品のおもしろさ」に気づかせようとしたのかという編集の意図も説明されていない。

まずは、素材となる教科書教材『竹取物語』に、以上のような課題を見い出した。次に、教科書教材『竹取物語』が素材として持つ教育的価値の見極めを行う（素材を教材化する）ために、『竹取物語』という素材そのものを深く理解するための素材研究を行うこととした。

(2) 『竹取物語』の素材研究—作品研究を中心として—

① 『竹取物語』の構造

野口元大(1979)は、「『竹取物語』にとって、最も肝要な本質的なものは何か、それが具体的に表現されている中心部分はどこか(pp.90-91)」を明らかにするために、全巻を十の章段に分け、以下のように全体の構成を伝承の型と対比した(p.91)。

一	かぐや姫の生ひたち	化生説話・致富長者説話
二	つまどひ	求婚説話の序
三	五つの難題——仏の石の鉢	} 求婚難題説話
四	——蓬萊の玉の枝	
五	——火鼠の皮衣	
六	——龍の頸の珠	
七	——燕の子安貝	
八	御狩のみゆき	求婚説話
九	天の羽衣	昇天説話
十	富士の煙	地名起源説話

これにより、『竹取物語』は「いくつもの伝承の型を取り入れ、それを複合させて新しい物語に仕立てている (p.91)」とした。具体的には、『竹取物語』は「羽衣説話の間に、天女と人間の男との結婚の条を割り込ませて成立した物語 (p.92)」であると、羽衣伝説と求婚難題説話を中心となる構造であると整理している。

以上の考察から、野口は『竹取物語』の主題性が最も表現されている中心部分を認定する立場が、次のように大きく二種類存在すると述べている。

ア 羽衣説話の部分を物語の根幹と認める立場

イ 求婚難題説話の部分を物語の根幹と認める立場

これは、言い換えれば、『竹取物語』の「作品のおもしろさ」が表われている部分は、最も固定的な伝承の部分である昇天の場面が中心とするアの立場と、語り手が創意工夫し、独自の思想が発揮されている求婚譚が中心とするイの立場の二つが想定されるということである。つまり、『竹取物語』の「作品のおもしろさ」は、羽衣説話の持つ幻想的で空想的な物語性と、求婚難題説話の持つ現実的で諧謔的な説話性という二つの表現特性にあるということである。^(註1) まず、素材としての『竹取物語』が持っている本来的な特徴を以上のようにとらえた。

しかし、野口は現代の読み手である我々の『竹取物語』に対する感覚を、以下のように説明している。(p.93)

しかしともあれ、これをさきに見た現代人の心にしみこんでいる「かぐや姫の物語^(註2)」と引き比べてみるならば、言うまでもなく、羽衣説話の部分のみが圧倒的な大きさに受け入れられて、求婚難題説話の方ははなはだ貧困な印象しか残していないというのが実情であろう。

ここでは、『竹取物語』の「作品のおもしろさ」を支える二つの表現特性のうち、「求婚難題説話の方ははなはだ貧困な印象」であることが一般的な特徴となっていることが述べられている。

② 『竹取物語』を教材化する視点

これまで述べてきたように、『竹取物語』は幻想的な空想物語（ファンタジー）としての面ばかりが強調される傾向がある。そのため、学習者である中学生を含めた現代人一般が持つ『竹取物語』像が、「かぐや姫の物語」という昔話化された枠に矮小化されてしまっているという問題があると考える。換言すれば、『竹取物語』の「作品のおもしろさ」を支える二つの表現特性のうち、羽衣説話の部分ばかりが強調されることで、求婚難題説話の部分に目が向けられない傾向が強いということである。

教科書会社五社すべてにおいて『竹取物語』は採録されている。さらに、原文が採録されている

場面は、光村図書以外はすべて昇天の場面に集中している。中学校における入門教材としての位置付けから、求婚難題説話の部分は説明する程度に抑え、昇天の場面を中心に扱うことで馴染みのある昔話「かぐや姫の物語」の延長線上に『竹取物語』を置くという配慮が施された結果と考える。しかし、光村図書の掲載場面である「蓬莱の玉の枝—『竹取物語』から」は、求婚難題説話の「③くらのもちの皇子が語った蓬莱山の様子」の場面である。そこで、この素材は、既知である昔話「かぐや姫の物語」を多少の原文を音読することで内容を追認するだけの授業を越え、中学生にとって未知の『竹取物語』に出会わせることができる可能性を持っていると考えた。以上のことから、教科書教材『竹取物語』が素材として持つ教育的価値を、未知である求婚難題説話の部分を読むことで『竹取物語』の新たな「作品のおもしろさ」に触れることができることにあるととらえた。

(3) 単元の概略

① 単元設定の理由

以上のような素材研究を基盤とした教材研究の上に立ち、令和元年度高知大学教育学部附属中学校の研究発表会では、「『竹取物語』のおもしろさを伝える紹介文を書こう～物語の構成の効果について考える～」という単元名で授業を構想することとした。今村教諭は学習指導案に、「単元観」を次のように記載した^(注3)。

『竹取物語』は「物語の出で来はじめの祖」と呼ばれる、現存する日本最古の物語である。長年にわたって中学校1年の教科書に掲載され、古典学習の入り口となる題材である。紙面上、一部分が取り上げられ、概要は現代語で書かれている。それゆえ、これまで、古文の読み方を学びリズムよく音読することを中心とした学習や、教科書に掲載されていない部分を現代語訳する学習が多く行われてきた。(中略) そうした授業が「深い学び」につながるのかという疑問が生まれ、『竹取物語』を文学的文章として“読むこと”を指導してみようと考えた。

「新潮日本古典集成『竹取物語』解説(野口元大)」によると、「『竹取物語』は、羽衣説話の間に、(中略)求婚難題説話を割り込ませて成立した物語だとみなすことができる」とされている。求婚難題説話が盛り込まれたことによって、それまでの羽衣説話とは異なる「物語」に仕上がっているというのである。しかし、同解説によると、現代人の心にしみこんでいる「かぐや姫の物語」は、「羽衣説話の部分のみが圧倒的な大きさで受け入れられて、求婚難題説話の方はなほだ貧困な印象しか残していないというのが実情であろう」とも述べている。おそらくは、生徒にとっても「かぐや姫」の物語は竹の中から見つかることと、昇天の部分が印象的で、その間の話が抜けている、ということが予想される。そこで、五人の貴公子の場面に焦点を当てて、内容、展開を読み取らせ、この場面があることで物語全体にどのような効果をもたらしているか考えさせたいと思い、本単元を設定した。

『竹取物語』の「作品のおもしろさ」を支える二つの表現特性のうち、羽衣説話だけでなく、学習者たちには馴染みの薄い求婚難題説話に触れさせることで、新たな『竹取物語』像を作り上げようとしていることが述べられている。

② 指導の計画

教科書教材『竹取物語』(蓬莱の玉の枝—『竹取物語』から)を使いながらも、素材である『竹取物語』の特徴を生かすために、五人の貴公子たちの求婚譚をまとめた自主教材を作成した。古文に傍注をつけたものと、現代文による要約で構成している。単元の計画は以下の通りである。

第1時	①全体の構成をとらえる。②冒頭部分で歴史的仮名遣いの読み方等を確認する。
第2時	①くらのもちの皇子の話の内容を、性格・難題・対処・結末等の項目にまとめる。
第3時	①担当した貴公子の話の内容だけを、上記の観点にしたがってグループごとに読み取る。
第4時	①ジグソーグループで、担当する貴公子の話の伝え合う。②五人の共通点を見つける。
第5時	①五人の貴公子の話のおもしろさについて話し合う。②紹介文にまとめる。
第6時	①紹介文を読み合い、意見を交流する。②単元全体を振り返る。

第1時で学習者に既知の昔話「かぐや姫の物語」を想起させた後、教科書教材『竹取物語』の全文を音読して内容を確認し、二つには違いがあることに気づかせる。本単元では、今まで意識が薄かった五人の貴公子の部分を読むことで新たに発見した『竹取物語』の「作品のおもしろさ」を紹介文にすることがゴールであることを確認する。第2時では、五人の貴公子の求婚譚をそれぞれにまとめたプリントを準備する。まず、全体でくらのもちの皇子の求婚譚を読み、ワークシートに性格・難題・対処・結末・かぐや姫の反応の項目にまとめる方法を練習する。第3時では、残りの四人の貴公子（石作の皇子・右大臣安倍御主人・大納言大伴御行・中納言石上鷹足）の求婚譚をグループに割り振り（各グループ一人の貴公子を担当）、自力でワークシートの項目について読み取った内容を整理する。第4時では、ジグソーグループに編成し直し、それぞれのグループが整理した内容を伝え合う。第5時で、来年の中学1年生に『竹取物語』のおもしろさを伝える紹介文を書かせる。

5 研究の成果と課題

本稿では、具体的に『竹取物語』を素材として、徹底した素材研究を経て試作した単元の概略を提案することができた。紙幅の関係で紹介できなかった授業の詳しい様子は別稿で報告したい。

国語科における素材研究の重要性に異を唱える者はいないだろう。しかし、実際問題として、今回のような素材研究から単元を立ち上げるという手順は、連日多忙な業務に追われている現場の教員には荷が重すぎるのではないかと考える。今回の実践も大学の教員と中学校の教員が共同研究という形をとってようやく実現したものである。今後も継続的に素材研究を生かした単元を構想していくための具体的な手立てを相互に連携しながら考えていきたい。

注

（注1）最終的に、野口は昇天の場面を「この作品の主題性が、この箇所において、最も直接的な、かつ最も著しい表れ方をする(p.105)」とし、『竹取物語』の中心的な部分は羽衣説話であるという見方を示している。

（注2）野口(1979)で「かぐや姫の物語」とは、「竹の中から生まれて、十五夜の月明の中を天に昇っていく(p.90)」物語であると説明している。

（注3）「令和元年度 高知大学教育学部附属中学校研究発表会 指導案集」p.4より引用。

文献

- 関口安義(2018)「教材研究」田近洵一他編『国語教育指導用語辞典 第五班』明治図書：176-177
 光村図書版(2016)『国語1』
 光村図書(2016)『中学校国語 学習指導書1下』
 野口元大(1979)「解説 伝説から文学への飛翔」『新潮古典文学集成 竹取物語』新潮社：87-183
 文部科学省(2008)『中学校学習指導要領解説 国語編』東洋館出版